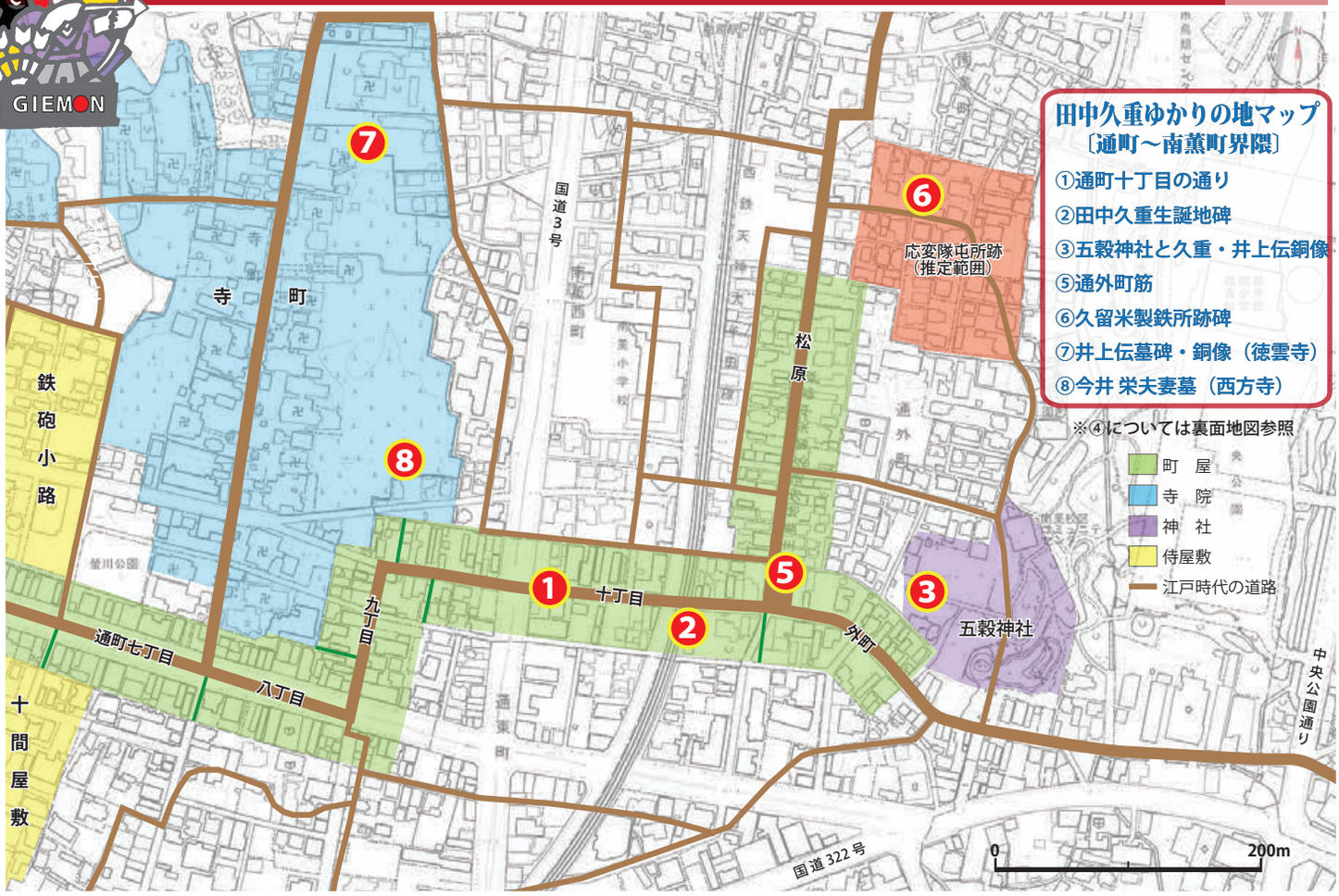
東洋のエジソン・田中久重 (TANAKA Hisashige)



Ⅲ．久留米藩製造所跡（御井町）

京都・大坂での活躍後、佐賀藩に招かれた久重は同藩の近代化に大きく貢献し、その名声を聞きつけた久留米藩へ呼び戻されます。まず、鑓水古飯田に工場が造られ、そこで最新の西洋式大砲をモデルに大型の大砲を製造しました。

大砲は、領内の寺から集められた青銅製の梵鐘を溶かし、鋳型に流し込んで鋳造しています。これには、鋳物師・植木善作兄弟の尽力がありました。更に、旋盤代用の機械を工夫してつくり、人力で回して砲の内部を削ったといいます。

慶応２年（1866）春、藩主はじめ藩幹部が見守る中、古飯田台地上から完成した大砲の試射が行なわれました。的は飛岳山腹。勢いよく発射された砲弾は、目標をはるかに超えて飛んでいきました。この大成功に、久重はじめ、製造所の役職員は皆、喝采を叫んだそうです。

Ⅳ．久留米製鉄所跡（南薫町）

慶応３年（1867）、工場は久重の生家裏付近に移されました。敷地は千坪（約 33,300 ㎡）もあり、そこでは当時の久留米藩が採用していた西洋式の小銃を模造しました。製品のできばえに藩主は大変喜び、更に２万挺もの追加生産を命じました。

通町の工場が手狭となったため、明治２年（1869）に南薫へ移転しています。ここには２棟の建物が東西に並び、長崎で購入した旋盤も３台据え付けられました。機械の動力として蒸気機関を利用し、従業員の数は百余名にのぼりました。

しかし、明治４年７月、廃藩置県となると、その事業も停止となりました。久重は工場の機械を借用し、明治６年１月に上京するまで、各種機械の製造を行ないました。